

情と景の往還

三沢左右

読者の感情を短歌の世界に引き込む力強さが魅力の大森静佳。その第三歌集『ヘクター』を読んだ。

さびしいと手の大きさがちぢむひと光のなかでゆでたまご剥く

泣き疲れた微笑みという表情を木にもあなたにも見てしまおう

大森静佳『ヘクター』

大森作品の特徴に、名詞の抽象度の高さがある。人名などの固有名詞は登場するが、植物などを、その品種名まで詠み込むことは少ない印象だ。抽象度の高い名詞は、より多くの読者に届き、想像力を喚起する。もちろん抽象的な語彙は一首をぼんやりとしたものにする危険をはらむが、大森は鮮やかな修辭や飛躍によって一首の輪郭を際立たせる。

『ヘクター』では前二歌集よりやや具体名が増えたように思うが、それでも抽象的な名詞の持つ射程の広さは健在だ。一首目の「ひと」の存在感、二首目の「木」の抒情は大森ならではの言葉。抽象化された景や物をキャンバスとして心情の揺れのダイナミ

ズムを描写する力が卓越している作者だ。大森と逆の方向から景にアプローチするのが竹中優子だ。第一歌集から引用する。

才能がないと言いつひとがいてこんな感じになって顔で聞く

いつの間にか眠った時間を巻き戻す映画に犬と冷蔵庫映る

生きてきて早送りボタンの止めどころ分

かる例えばエレベーターの会話

竹中優子『輪をつくる』

竹中作品において、風景は自身の感情のキャンバスではなく、あくまで自分の外に自立的に存在する。克明に描写された景と、それに対峙する主体の心情の動きが詠まれ、その結果、作品には景と情との不一致や違和が細やかに刻み込まれるのだ。

さらに、作者の感じる違和が、外界への批判的な目線に留まらず、作者自身にも向く形で表出するところに、竹中作品の本領がある。

一首目の「こんな感じになって顔」という自身の突き放し方は鮮烈だ。二首目では、自分がコントロール出来ていたはずの映画視聴

の一幕を詠むことで、世界の自立性に思いがけず気づいた瞬間を鮮やかに切り取る。そして三首目ではその視点を「今ここにある自分自身」に向けて転回する。

最後に、違和ではなく親和に重点を置いて外的感覚と内的感覚との間を軽やかに往還する河合育子の作品を第一歌集から引用する。

全体重かけつつ南瓜切りしのち南瓜ひとつぶん息を吐きたり

曇り日の複写機ひらき詰まりたる雲のひとひらつまみ出したり

河合育子『春の質量』

一首目では南瓜という対象をきっかけに自身の身体感覚が強く意識され、自身の身体が内蔵していた「南瓜ひとつぶん」の質量が不思議な具体性を持って描写される。二首目では、ただの皺ばんだ紙くずが、作者がこれまでに何度も見上げたであろう「雲」のイメージとひと息に結びつく。

視覚に留まらず、五感全てが連関し合い、視覚が聴覚を、聴覚が嗅覚を呼び覚ますのが河合作品だ。情と景の自由な響き合いが読者の五感をも呼び覚ますよう、心地よい。

情と景。三者それぞれのアプローチは大きく異なるが、情と景とが出会うところに歌が生まれることを改めて実感させる三冊だ。